

115

~~群~~  
102

# 海南島周航記

宇田道隆

農政(農林省內農政協會)

九月号所載別刷

1卷9号

昭和十四年九月

# 記航周島南海

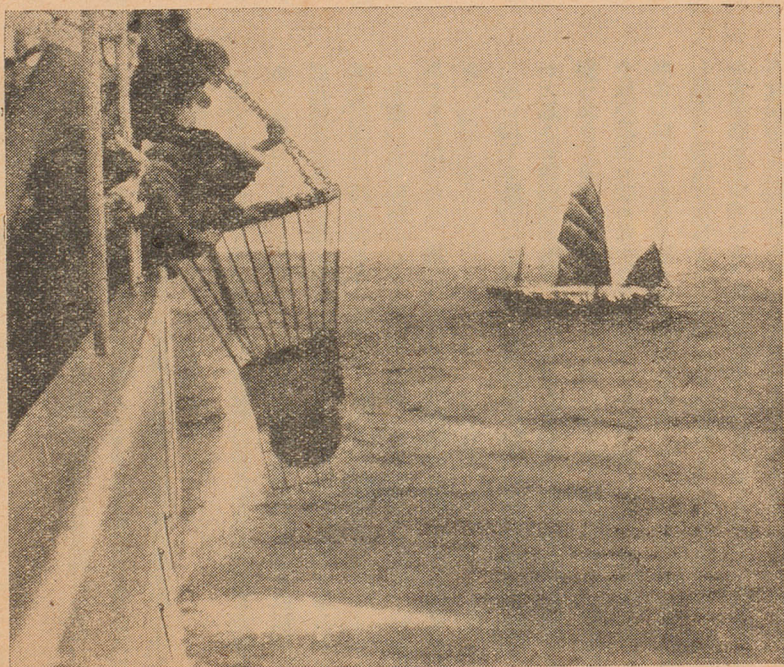
## 隆道田宇

前書き—今年の六月三日蒼鷹丸に乗つて東京を船出して六十二日間海洋調査に従事し、南海を巡つて歸つて來た。以下の文は單にこのやうな海上生活を送つた者の認めた日記の一節に過ぎない。標題に似合はず支那東海から書き出したのは海南島附近の海を語る便宜上からである。

### 支那東海から

臺灣へ

六月十三日。九州の南端から西へ走つて支那大陸棚の水深二百米線以内に這入ると今迄の黒潮の美しい藍色が急に失せて、海の色が



黄味を含んだ緑色になつて来た。四千年來揚子江、黄河、珠江等の百川が吐き出した支那大陸のアカが混つた色である。愈々支那海へ来た」と思はずつぶやいた。

此の大陸棚縁は綺麗な鹽分の濃い黒潮系水と濁つた鹽分の淡い支那海系水との潮境に當つてゐて丁度今時分の鱈漁場と油津でも開いて来たが、稚魚採集網を曳いて見ると澤山稚魚やアミがとれ、如何にも餌料豊富で漁場價値の大きいことが肯かれた。この附近を航海中曳網に、體長一米十五種、體重三貫百匁と云ふ大きな沖鱈が罹つた。腹を裂くと珍しくも重さ百匁もある部厚な生々しい鱈の切身がハミ出した。あの快速な鱈の逃げるのに追ひ迫つて、カブリと鋭い齒で生身を噛りとつた、海中の目に見えぬ修羅場を想像して一瞬恐ろしい氣持がした。

廿日の深夜基隆の北方で觀測して居ると燈火の下へ黒頭で胴に四十以上も黄色いダンダラの帯模様をした海蛇が泳いで来たので早速攔網で抄つてのたうつ奴をフォルマリソ液にし青酸加里でやつと殺した。琉球臺灣、南支那海等の海中にすむ溝牙蛇の一種で噛みつかれる猛毒をなすといふので大分緊張した。確かに眞夏の夜の一ヌリルであつた。後で照南丸(臺灣總督府水産試験場)の船長に聞いた話では濠州近海の貝採りの潜水夫など毎年一人二人海蛇に噛み付かれて生命を落す犠牲があるといふ。又船員で其の胴の肉を味噌汁に入れてたべるものもあるが仲々美味い由である。安南海灣でも海蛇を

の唄のやうなものを歌ふ。それを婦人を混へた相當年老いた人々が隣居し或ひは石段に腰掛けたまゝ如何にも感に堪へた面持で聞き入つてをる。空には星の降るやうな涼しい宵である。

二回も見た。この海蛇の化學的、生物學的研究は興味があると思ふ。

廿一日基隆に入港した。暫らくの間縁の海ばかり見馴れた眼には水馬のやうに動く小船や戎克の色彩とガツシリした岩山など如何にも美しく感ぜられた。榕樹など鬱鬱たる樹間には蟬の聲が降るやうであつた。

二十二日も碇泊、寛いだ氣持で南京街の夜景を見る。兎に角臺灣といふ處は、人口六百萬のうち九割三分迄本島人即ちもととは福建、廣東系統であり、四十萬が内地人、生蕃數萬といふ分野であるといふ。南京街に踏み入ると一種の匂と燥音の交響樂が湧き起つてゐるのを感じる。街路に眞座を敷いて寢轉んで星を見てゐる者、竹欄にあぐらをかいたり、横になつたりして芭蕉扇を動してゐる者などある。

狭い横丁の路次に這入ると支那料理の油濃い匂が無暗に鼻につくかと思ふと簷飾つた垂簾の小供のやうなビーが客を呼んだり洗目を與へたりする。此處を通り抜けて關羽廟のやうな所に出る。饅鬚麥や豚の臍物の焼いたものを山盛りにした大皿、杏子、鳳梨や荔枝を串ざしにしたもの、沸々煮え立つ支那風オデンとも云ふべき大鍋を圍んで胃袋だけになつたやうな島人が赤く上氣した顔をして露天の大饗宴をやつてをる。廟の門前には月琴のやうな樂器を抱へて頗る急速調で爪弾き乍ら老いて盲ひた音樂師が哀調を帯びたジブシー

廿八日。黎明にドレッヂを曳いた所、網の中から燦然として輝く生きた月貝が出て来た。白い肉柱と美しい藤色と黄色の貝殻を持つ南海の特産である。其他蟹類、オコゼ、芋貝など獲物が多かつた

では濠州近海の貝採りの潜水夫など毎年一人二人海蛇に噛み付かれて生命を落す犠牲があるといふ。又船員で其の胴の肉を味噌汁に入れてたべるものもあるが仲々美味い由である。安南海灣でも海蛇を

の唄のやうなものを歌ふ。それを婦人を混へた相當年老いた人々が蹲居し或ひは石段に腰掛けたまゝ如何にも感に堪へた面持で聞き入つてをる。空には星の降るやうな涼しい宵である。

寺廟の奥には香煙裊々どころか一面煙つてをる裡に關羽劉備張飛のやうな粉黛蒼古の像が安置されてあつてその傍では何人も男だちが大きな札で何か勝負をしてをり私共を見ると急に止めた。又樓門の傍では支那將墓に夢中になつてをる一團もあつた。彼等の自由な法悦境の安易さ、虚飾のない氣樂な顔ひと享樂振り思はぬ見物であつた。

二十三日出港、富貴角から白沙岬にかけての潮浪は相當高く、デツキで波の飛沫を浴び乍ら握飯を煩張つた始末であつた。

二十七日。夏雲奇峰の態を盡し巍々たる入道雲の偉觀が四邊を壓してをると見るうちスコールが時々白く飛沫を立てゝやつて来る。臺灣堆の南端附近に連立てた潮目と共に滑らかな水面一帯にモクモク湧き上る潮文字を目撃した。

### 南 支 那 海

臺灣堆以南は悉々南支那海である。水温は二十九度から三十度以上に迄昇り、鹽分は降下する。東海の方の規則正しい半日潮と違つて日潮不等が大きく一日潮が卓越する。南西の季節風が海流と共に強くて之を測るので一向速力が出ない。

を圍んで胃袋だけになつたやうな島人が赤く上氣した顔をして露天の大饗宴をやつてをる。廟の門前には月琴のやうな樂器を抱へて頗る急速調で爪弾き乍ら老いて盲ひた音樂師が哀調を帯びたジブシー

廿八日。黎明にドレッヂを曳いた所、網の中から燦然として輝く生きた月日貝が出て來た。白い肉柱と美しい藤色と黄色の貝殻を持つ南海の特産である。其他蟹類、オコゼ、芋貝など獲物が多かつた午後汕頭沖合遠くに投錨する時砲聲に似て殷々たる響が空に飴するのを聞き、事變色の漸く濃厚な區域に踏み入つたことを感じ緊張を覺えた。

附近の水色五位の綠色をした波上に濺團扇のやうな黄褐色の巨きな帆を張つた戎克が三四隻浮んで居り、傳馬を幾つか從へた母船として底繩を延へて漁をやつてをる。其の船中には眼鏡で見ると女や小供の姿が見える。最初遠望した時海賊船ではないか、夜陰になつて四方から襲撃された時は武器一つ持たない本船ではどうしやうと眞面目になつて自分は考へてゐたが、向ふの方がかへつて恐れたものと見え何時の間にか逃げ去つた。あれは支那良民の一家を擧げて戦火を逃れて大海を漂蕩するものではない。廣東、香港、汕頭、厦門方面を根據とする二艘曳打瀬網や底繩船では女小供も乗せて家族全體で漁船を家とし仕事をするものが多い相である。

蒼鷹丸は此處で測流の傍ら底延繩を延へた處が淡紅色の地の所々淡紫色に輝く、中に黄金色の條を走らせたとても華麗な魚イトヨリ(支那名紅三、金絲魚等)と連子鯛が鉤の一割以上にも罹つて盛んに揚る好成績であつた。

此の好漁場は陸棚縁の深く切れ込んだりで、五米以淺の上層水

温は廿九度、八十米の底層水温は十九度といふ大きい水温差を示した。そして臺灣堆以南香港沖迄頗多であつた。プランクトンが此處では最も多量で、絹網の目が塞つて了ふ程で、ドロ／＼と粘り氣があつて白味を帯びた黄綠色で丁度フノリか寒天を落かしたやうであつた。それが寄り集つてワイヤーに糸のやうに絡み、到頭潮流計の使録の作動を止めて了ふといふ珍現象に出會した。(このプランクトンは歸廳後相川技師の檢鏡に依ると珪藻類のキートセラスが主でバクテリアヤストルムがすこしであつた。)

三十日。香港南方沖合に來ると戎克や汽船に會ふ數が増え、水の色はフオーレル番號一、二といふ位綺麗な黒潮色を呈して來た。潮流の合間には仲々美味い大ワグが鉤にかゝつて來た。

七月一日。南支那海では氣壓の一日變化が實に規則正しく日記晴雨計の記象紙の上に出る。之れが狂ふと荒天の前兆として注意されるのである。

二日。毎晩のやうに飛魚が船の中へ飛び込んで來る。停船して觀測してをると燈火の下に三乃至五握大の目玉が蛙の子に似て大きく、翅を擡げたさまは蝶々のやうな飛魚の仔魚がまるで稻田を飛び立つ蝗のやうに澤山飛び跳ねる。

水色三位の藍青の海に黄褐色の變色水團が現はれる。南支那海特に海南島近海に此の變色水團が多い。丁度葉の切れ屑でも水面に浮いてをるやうに見える。そして潮目の線に帶狀をなしてをるものが

屢々見られるから、繁殖したプランクトンが潮目に寄せ集められたものではないかと思ふ。(このプランクトンも歸つてから丸川技師の査定を願つて藍藻類のトリコデスミウム的一種と判別した。)

この日の黄昏に海南海峽の東口に達した。この海峽には船の底に觸れるやうな淺瀬が數列に分布し、殊に冬春季は霧靄の各所で暗間も少く其の上潮流は二、三ノットと云ふ急流で全く航海上の難所であり、支那人の水先案内を乗せて居ながら座礁した船が少くない。今は燈浮標もあるが始めての水路故大事を執つて錨泊し天明を待つた。デツキの上は海風涼しく星座も美しく眺められ、蝸、ケンタウルス、鳥の間に南十字星を始めて見た。

#### 海南島と其の附近

三日。午前五時海峽に入るや海水は泥色に變り高温となる。雷州半島は指呼の裡にあり支那兵の砲口を向ける大陸の片鱗を遠望して聊か興奮に似た感じを覺える。海口港外に錨泊し、飲料水の補給や海水の整理分析をやる。碇泊中軍の方々に色々お世話になり、又勝間田善作翁や甥の岩瀬氏の好意により有益な見聞を得た。

海口西方岬の崖の丹朱色は黄緑の海の色に續いてをる。白聖の建物の背後に檳榔、椰子、棕櫚の林が茂つてをり、その後には遠くの圓味を帯びた五指山の山脈の方へ淡綠色の丘陵が緩やかな傾斜でウネつて行つてをる。天も地も海も眩しい程光線が強い。入道雲が天

を衝いて立ち上つてをる。昨日までは毎日のやうに夕方になると猛烈なスクールがやつて來て紫電閃々雷霆をはためかし風力七、八といふ狂風をほんの一時乍ら飛ばし通つた後は暑熱を一拂ひに拭つて

委英砲臺には、まだ生々しい砲彈や爆彈の落ちた痕が残つてをり、濱畫顔が其のそばで無心に咲いてをる。此處には牡丹臺だの拱北臺だの色々の砲臺に文字の國らしい名前がついてゐる。又砲臺の

水色三位の藍青の海に黄褐色の變色水團が現はれる。南支那海特に海南島近海に此の變色水團が多い。丁度藥の切れ屑でも水面上に浮いてをるやうに見える。そして潮目の線に帶狀をなしてをるものを衝いて立ち上つてをる。昨日までは毎日のやうに夕方になると猛烈なスコールがやつて来て紫電閃々雷霆をはためかし風力七、八といふ狂風をほんの一時乍ら飛ばし通つた後は暑熱を一拂ひに拭つて呉れて涼しくなつたそである。

この雨の恵みがなければ芋も甘蔗もジャングルも稻田も皆オジャになる。四時夏一雨よく秋をなすとはよく言つたものである。あの丹朱の土は火成岩の風化したもの由であるがモッコを擔つて路を歩いて行く目ばかり光つた海南島土人の農夫の皮膚の色もこの土から抜け出したやうな赭黒である。地人相關と云ふ言葉の眞實が痛切に感じられる。

一帯に此の海南島に限らず岱嶺色と云ふか丹穀色といふかあゝ云ふ赤い土は熱帯特有のものらしい。この土がどれ丈け農耕的價値を持つつか、何となく見ただけでも生々しい土である。海南島の北部は割合よく開拓され灌漑されてゐる模様であるが、一體に日照と暑熱の厳しいせいか、南部の方など水利が充分でなく龜の子形に地割れた田畑や、乾き切つた肌を見せた砂地に仙人掌の赤黄の花が咲いた荒野など荒蕪に委かされた所が大分目についた。何せお米が年に三回もとれ、やり方一つで將來は年に五回も穫れるだろうと云ふ嘘のやうな話の土地だから、水利灌漑が行き届けば島全體から素晴らしい收穫が擧げられるに違ひない。椰子やゴム等の植林も幾らでも開拓の餘地が見出だされるらしい。

物の背後に檳榔、椰子、棕櫚の林が茂つてをり、その後には遠くの圓味を帯びた五指山の山脈の方へ淡緑色の丘陵が緩やかな傾斜でウネつて行つてをる。天も地も海も眩しい程光線が強い。入道雲が天

委夷砲臺には、まだ生々しい砲彈や爆彈の落ちた痕が残つてをり、演習顔が其のそばで無心に咲いてをる。此處には牡丹臺だの拱北臺だの色々の砲臺に文字の國らしい名前がついてゐる。又砲臺の外壁に草花の彩色畫が描れてゐたり、砲はチエッコ製か何かであるが、砲座や方々に赤い彩色をしてあつたり、迷彩のつもりだけである、どうもかうしないと矢張り支那の兵隊は氣が濟まないものらしい。海口に行く途中には草薺々たる土饅頭の臺が澤山並んだ丘があつて、合歡樹、林投樹などの木のかげを瑠璃鳥、鸚鵡の姿を見かけたり九官鳥の啼聲を聞いたりする。所々に池や沼があつて紅白の蓮の花が微涼に戦いでをる。黄牛の仔が悠々と彈痕のある丘に緑の草を喰つてをる。

海南島は古きものの破壊と新しきものの建設が同時になされてをる。海口、瓊山の風景は火野葦平氏の印象記により實によく描かれてをると感じた。黨風動くも烈しい日差しは満身を汗にし夏服を浸さずにはをかね、黄色い花の咲いた相思樹下に憩ひ汗を拭けば左手の樹間に丹朱青泥の剝落しても尙數百年の寂びを保つ海南第一樓蘇文忠公祠がのぞいてをり、前方には柳の下を小川が流れ、牛を驅る農夫があり、遠くには悪魔退散せよと瓊山の奇塔が聳へてをる。白く輝いた雲の峰は青空にのび上つてをる。

五日拔錨、海南海峡を西へ流れを測つて安南海灣(東京灣)に出る。それから東經百八度線を下下し乍ら安南海灣の底棲生物や稚魚の採

集を觀測と共に行ふ。北部の方には泥深く、ゴカイ、海百合類が少しあるばかりで介殼も少く底魚漁場として感心出来ないが南部に来ると砂氣が多くなり二枚介、巻貝、海扇など介殼や生物が多く漁場として好適なものやうに見られた。稚魚は一體にこちらの海には多い。ホンダワラのやうな流れ藻や、大クラゲなどを掬つて見ても其の下にヒラアザの仔のやうな子魚が澤山ついで流れてをる。硝子瓶に海水を入れて放し、それらの小魚が嬉々として泳ぐさまを見るのは和やかな心樂しいものである。

六日、相變らず海面上には帯状や斑紋状の變色水團が縞をなして存在する。支那の水産調査報告書に「紅流」と記され、鯧シラギの漁場であり産卵場であると唱へられてゐるのはこの事らしい。午後三時鯧群にあふ。

七日、午後二時銀色のカマスに似た魚（體重一貫四二〇匁、體長八四匁）を釣る。鋭い牙のやうな歯を具へ、宛然海の狼とでも言ふべき嚙猛さである。午後三時體長三九匁體重六百十四匁の黒鮪の仔を釣る。これの系統はバシ海峽附近の黒鮪漁場のそれと同じでないかと思ふ。夜ダツ三尾すくふ。丁度サンマに似たやうな色合ひで體長二一—三六匁である。午後十一時半北緯十七度に南下、本航海の最南點で星は滿天に花の咲いたやうに美しい夜である。

八日、午前四時に、稚魚網を曳くとヒラアザの仔や、紫色の管水母、緑色の攪脚類、紅色の蝦蟹の仔などいかに多彩な生物がとれ

て瓶の内に躍動し、黒潮系水の影響を感じた。午前八時（日本標準時、地方時は約二時間差があるから午前六時になる）檣林、三亜の南方に来ると朝雲に浮ぶ山々が見え出して海南島の雄大な大景に燃ゆる朝日が輝き出した。

十時三亞に投錨。灣口に東洲、西洲といふ椰子樹の茂つた低い島があり、シヤコ介や高瀬貝がとれる相である。又入口の岬附近には一尺もあるやうな龍蝦や大蛤など棲息し時々とれるといふ話を聞いた。

此處でも何かにつけて軍の方々の一方ならぬ御好意に與つた。全く大陸やこの島などの第一線に眞黒になつて働く將士の姿を目のあたりにすると熱々御苦勞であると思ひ、興亞の大業、建設の意義が痛切に感ぜられた。野菜や、鮮魚、良い飲料水など出来るだけ多く供給し、銃後から慰問を送らねばならぬと感じたのである。

あたりを見廻すと肩にとまつて啼くセキセイインコ、チヨコ／＼走る可愛いボケツト猿、カラヂウムの花鉢……。やがて治まる海南島からは幾多の珍しく楽しい風景が紹介されることであらう。軍の努力で海南島にも最近自治の新政權が誕生したさうである。何分大陸とは海で隔絶された島である。蔣介石がいくら焦つてもジャンク一隻入り込む隙もない海上封鎖が完成されてゐるのだから、五指山中に通走した抗日軍は森林の虎豹大蛇の群と擇ぶ所はないものに化しつゝある。

この島では建設事業が急速に進展する可能性を持つてをる。臺灣より一割位廣いジャガ芋形の島であり、人口二百五十萬位といふ九割迄漢人で一割が黎人（先住民民族である蠻人）ださうである。

のために親が教へ込んで言はしてゐるのか、それとも十歳になりなからずで最早喫煙の習慣に染んでゐるためか分らなかつた。

九日檣林を見る。山高く四方を圍れて漁港としてよい港だ。海水

最南端で星は満天に花の咲いたやうに美しい夜である。  
八日、午前四時に、稚魚網を曳くとヒラアヂの仔や、紫色の管水母、緑色の機脚類、紅色の蝦蟹の仔などいかに多彩な生物がとれ

この島では建設事業が急速に進展する可能性を持つてをる。臺灣より一割位廣いジャガ芋形の島であり、人口二百五十萬位といふ九割迄漢人で一割が黎人(先住民)族である蠻人(ださう)である。

何かにつけて臺灣に似てをる。決して臺灣より瘴癘の地とは思へない。勿論從來コレラ、チブス、赤痢、天然痘、マラリヤ、デング熱など悪疫の流行はあるにしても衛生思想の島人に欠如してゐた事に大きな原因がある。島内資源の豊富は之れ迄の調査でも喧傳されてこれから盛んに調査團が奥地深く繰り出されて行くにつれ全貌が判明するだらうが、水産の方は最早大體調査済といつてよい。之から如何に開發運営して行つてこの資源を破壊しないかといふ事の方が大切であらう。

海南島の南部三亞の方は北部の海と違ひ風物に如何にも熱帯の色彩が濃い。

カーツと白い日光の射返す路をテク／＼歩くうち土人に會ふと例の蒲葵か竹で造つた市女笠をとつて最敬禮をする。特に銃を擔つた武裝いかめしい人に對して恭しい。彼等のうち一體だけが海南島に樂土境を建設する理想を理解してゐるだらう。すれ違ひざま不圖こんなことを考へる。

しかし、海南島全體がユートピアになるのは皇威の照らす處も遠い先のことでないやうな氣がする。道路のか傍ら小供に「先生！煙草／＼」とねだられて急に空想の夢が覺める。あれは煙草の缺乏

一隻入り込む隙もない海上封鎖が完成されてゐるのだから、五指山中に遁走した抗日軍は森林の虎豹大蛇の群と擇ぶ所はないものに化しつゝある。

のために親が教へ込んで言はしてゐるのか、それとも十歳になりならずで最早喫煙の習慣に染んでゐるためか分らなかつた。

九日榆林を見る。山高く四方を圍んで漁港としてよい港だ。海水が澄み透つて港内にある珊瑚礁の州が二つばかり手に取るやうに見える。部落は土人の堀立小舎のやうな家が二、三十軒ある。

海岸に(黎民の?)水上家屋が一軒ある。戒克が十隻ばかり着に纏つてゐる。黎民の女など髪を布で縛つて山姥のやうな格好して歩いてをる。汗が出るのと其の布片で拭いてをる。赤ん坊を背中にくくりつけた布の間から手足を出してオンブしてゐるかと思へば、竹製の搖籃に入れて揺ぶつてゐる女もあつた。

濱には木の皮を煮て搾つた汁らしい赤い染料で地曳網を染めて居る。みんな裸足で平氣で日に焼けた砂の上を踏んで歩く。足の裏皮が雪駄の皮と同然であるに違ひない。渚には寶貝や蜘蛛介、シヤコ介など落ちてゐるのを拾ひ集めた。三亞の濱は砂濱で筆貝が多かつたが此の濱は珊瑚礁のこわれの所謂珊瑚砂である。

汗をふき乍ら椰子の茂る山路を歩くと畑に遊ぶセビヤ色の水牛の背の上に綺麗な青い色の鳥がとまつて凝つと動かない。背に群る蠅か虻でも喰つてゐるのだらうか。遠望するところ正に堯舜太古の民の悠々たる時代は斯くの如きものであつただらうか。三亞港市に近く鹽田がある。其の石垣に牡蠣がへばりついであつた。

三亞街近くバナナの生つた藪近く、小童等が口々に「異常ナシ」

と歩哨の口眞似をしてどなる。グチに似た生魚のおいた店がある。毎日では街路の露天で、海蟹、蛤のやうな介を賣つていたし、赤黒い鹽の塊りといった方がよい鹽鮭を賣つてゐた。買ふ方でも魚を買ふのでなく鹽を買ふ積りで買ふのだ相である。

十日港内に鰻が白雨のやうに跳ね、船のまはりを平鱈などの稚魚の泳ぐものが多い。アフリイカを突いたものもある。楡林の部落でも甘鹽アマでシラス乾を賣つてゐた。清瀾港外にも夥しい小魚の群の洄游が指示された。海南島の沿岸漁業は無論原始的で海口の沿岸にも漁棚がならんでをり、鮫鱈網や四手網に似た網、地曳網釣、打瀾網などがあるが、今の處魚族は豊富で人間に荒されてゐないやうである。三亞、楡林の南方には海水も藍色に美しく澄み飛魚の飛翔するものが多く夜も相變らず飛魚の仔が稻子のやうに跳ねまわる。

十一日、午後四時九五〇分の鯉一尾釣れる。魚體密度を測定して意外に輕いのに驚き、新しい研究問題を見出した。海南島の北東沿海には著しい特異冷水域が往復共に發見された。夕方東岸の清瀾港外に錨泊。椰子の密林が兩岸を蔽ひ四手網に似た敷網が何十統もあり鳥小舎のやうな魚見小屋が附近水上にあり中で土人が足で車を踏んで網を捲きあげるのである。一寸岸を離れた所に戎克が澤山あて漁をしてゐた。

十三日清瀾でも軍の方の御好意で色々有益な智識を得た。この港の口は狭く、淺瀬があり、潮流速くこの儘では大きい船は一寸はい

をる。安南海灣を左翼に南支沿海を右翼に抱く底魚漁業に就ては議論の餘地はないと思ふ。そして根據地として海南島のどこが最適かは最早自明のことになつてをる。シヤム灣、馬來東海、ジャバ海へ

り難いやうである。山道を大蜥蜴がスル／＼走つて逃ぐるかと思ふと一寸振り返へる。蛇は大變多い相で錦蛇の抜殻が木の枝にひつかゝつて居たと告げるものもある。蝸カタツムリは人家でも相當多いらしく被害者も少くないといふ。

日蔭の所には縁日で見ると「虎の尾」が叢生してをる。この邊でも農夫は水田へ出て黄牛をつれて耕作してをり、里芋の畑なども見られた。清瀾港の奥は浅い瀉のやうになつてゐて鰻など棲んでゐそうで、養殖適地ではないかと思はれた。海菜といふ海藻は遂に手に入らなかつた。

十四日清瀾を發し高雄迄ウネリとスコールの連続で十六日など波高五米もあり著しく惱まされた。夕方鯨群についた海鳥群の圓舞を見る。十七日高雄着。

廿一日出港、低氣壓通過直後の上鸞鼻附近は潮流東に激烈でウネリは山のやうに高かつた。こゝから那覇を経て東京へ歸つたのは八月三日、全航程約五千哩、百五十の測點での觀測を完了した。

筆者は海南島を一めぐりし四つの港を覗いただけの乏しい經驗でこゝに議論めいたことを人に強ひる考へは固よりない。しかし思ひ浮んだ感想を記しておくのも後々何か参考にならぬとも限らないと思ふ。

海南島は正しく支那海の漁業の中樞に位する形勝の地位を占めて

をると考へてよいが之れも漁業試験と海洋調査とを並行的に進めて行けば解決できるものであらう。

頗る豊富に棲息してゐ乍ら餘り利用されてゐないものと見られる

をしてゐた。

十三日清瀬でも軍の方の御好意で色々有益な智識を得た。この港の口は狭く、浅瀬があり、潮流速くこの儘では大きい船は一寸はい

浮んだ感想を記しておくのも後々何か参考にならぬとも限らないと思ふ。

海南島は正しく支那海の漁業の中樞に位する形勝の地位を占めて

をる。安南海灣を左翼に南支沿海を右翼に抱く底魚漁業に就ては議論の餘地はないと思ふ。そして根據地として海南島のどこが最適かは最早自明のことになつてをる。シヤム灣、馬來東海、ジャバ海へもこゝを根據にして驥足を延ばせば一足である。南支那海にはタイ

類、グチ、蝦、蟹等豊富であるが特に群棲する場所が所々にある。このやうな密集漁場の構成原理を海洋調査に依つて明らかにせねば

ならない。

又年々最大の生産額を持續するためには何隻の漁船が如何なる程度迄操業可能なりや、漁船の最大抱擁力と漁獲の變動、洄游経路を海洋の科學的調査に依つて明らかにせねばならぬ。琉球近海で盛んに、やつてをるやうな深海底延縄や深海一本釣漁業に對しては、南支那

海は全く處女漁場と云ふべきで頗ぶる將來性に富むと云はれ得るであらう。

浮魚漁場は鱈、鮪、旗魚、鮫の漁場として極めて廣大な面積を南支那海の南部及び東部を中心に見出し得られ、表南洋一帯に活動し得られる。

從來餌鱈の供給が出来ないために餘り手の付けられなかつた鱈漁の問題も海南島及び其の附近を考慮に入れて或る程度まで解決出来るのではあるまいか。若し更にフィリッピン、ボルネオ沿岸、安南沿岸が自由に漁業的に用ひ得るなら更に一躍進出来るであらう。旗魚と黒鮪の洄游と生活史は當方面に於ては先づ今の處疑問視されて

をると考へてよいが之れも漁業試験と海洋調査とを並行的に進めて行けば解決できるものであらう。

頗る豊富に棲息してゐ乍ら餘り利用されてゐないものと見られるアヂ、サバ、サワラ、イカ、ボラなども之から將來の漁業資源として注目される。高瀬介、廣瀬介、眞珠介、珊瑚等の資源は潜水と珊瑚網で隅なく探索すれば残された寶庫が數多く登場するものと思ふ。

養殖では海綿、ナマコ類、牡蠣、蛤の類には有望で適地も沿海にきつと見出されると考へられるし、サッエ、タツエビ、ウニの類も鯨と共に相當の收獲をあげ得る望みがあるであらう。

海藻については海人草は勿論有望である。海棠などといつてアヲサ、アマノリの類があるらしいがこの方は調査を俟たなければ何んとも云へない。

しかし何處でも藻場を荒廢させやうな採藻は戒めなければならぬ。同様の意味に於て稜潜りの追込網漁業は在來の沿岸漁業資源の保護のために一考し慎重なるべきものであらう。コーラル・フィッシュには燕魚、蝶々魚、花巾着魚などといふ頗る華麗な魚があり、將來は觀賞魚として金魚などと同列に上るであらう。

かくして海南島は臺灣、新南群島とタイ・アツプして南支那海の漁業を一元的に料理する三角形の頂點と見るべきものであらう。

(筆者、理學博士水産試験場技師)